大学生の進路選択における
キャリア・アダプタビリティに関する研究
― レジリエンスとの関連から ―

藤　田　尚　宏

大学生は環境に適合し自律的な選択を行い，自らの進路を選ぶ力を持つことを求められているが、実際に進路の選択に困難さを抱える大学生が数多くいることが問題となっている。この環境に適合し自律的な選択を行う力の概念としてキャリア・アダプタビリティとキャリアレジリエンスという概念を取り上げ、本研究に用いた。キャリア・アダプタビリティは「変化できる資質，大きな困難なくして新しいあるいは変化した環境に適応できる資質」を意味するものとされる。（Savickas，1997）またキャリアレジリエンスは，「キャリア形成を脅かすリスクに直面したとき，それに対処してキャリア形成を促す働きをする心理的特性」（児玉､2015）と定義されており，キャリア・アダプタビリティよりも，危機や困難などのリスクのある状況への克服・対処といった面に焦点を置いている。困難な事態にうまく適応して乗り越えていく心理的特性としてキャリアの領域にも用いられてきたレジリエンスをキャリア発達の概念として扱い，キャリア・アダプタビリティと合わせて概念を整理することで、環境に適合し自律的な選択を行う力をより詳細に理解することができると考えられた。

本研究は，３つの研究に分けることができ，研究ⅠとⅡを通してレジリエンスという心理的な特性を含んだ大学生のキャリア・アダプタビリティの概念を測定する尺度の開発と、開発された尺度について妥当性の確認を行った。そして研究Ⅲでは，大学生の進路選択の代表的な場面である就職活動について，就職活動不安尺度・就職活動状況との相関関係を検討することを目的として研究を行った。研究Ⅰではまず，65項目からなる予備尺度に項目分析として回答の選択肢への反応率を確認し、その上で因子分析を行った。その結果から，「コミュニケーション」「ソーシャルサポート」「将来展望」「積極的対処」「課題実行」「楽観性」の６つの側面からなる大学生版キャリア・アダプタビリティ尺度が構成された。そして研究Ⅰ、Ⅱを通して大学生版キャリア・アダプタビリティ尺度と自己有用感尺度やR-ICBS・職業忌避傾向尺度との相関関係を分析行った。その結果、自己有用感尺度との間に低～中程度の有意な正の相関が確認されたため、収束的な妥当性があると考えられた。研究Ⅲでは、大学生版キャリア・アダプタビリティ尺度と就職活動状況との間には、一つの質問項目にのみ５％水準の有意な負の相関が確認された。このように，多くの質問項目と相関関係が見られなかったことから，キャリア・アダプタビリティという概念が生涯に渡る各発達段階に沿って育まれるものであり，大学生の進路選択の代表的な場面だと考えられた「就職活動」という一場面では、捉えられるものではない概念であると解釈できた。

今後の課題として就職活動のような特定の状況に注目せず，大学生という発達段階を一つの区切りとし，縦断的に捉えた調査を行う必要があると考えられた。